

イリアイにある〈わたし〉の暮らし

まち全体で、多様な形で里山を活用する
 その中で、イリアイの中で、多様な〈わたし〉が自由に、豊かに暮らす。

1、はじめに

多摩丘陵の原風景が残るまち、小野路。
 昔、小野路では、里山と人は密接に関わっていた。
 人は里山を利用し、里山は人に恵みを与える。
 しかし、そんな里山と人との関係性は、時代を経て変化してしまった。
 私たちは、小野路で里山と人の関係を再構築するため、
 日常と里山が結びつく、新しい暮らしを提案する。

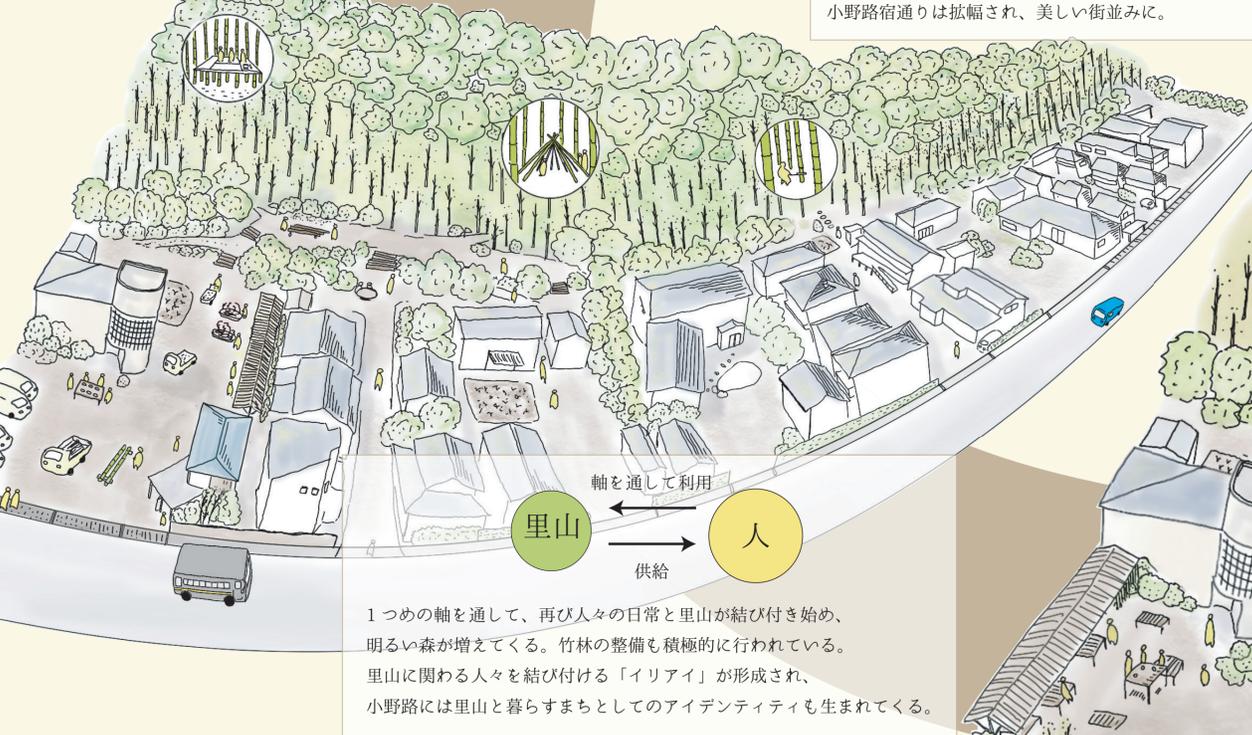
2、言葉の定義

イリアイ
 里山を利用する人々のまとまり

〈わたし〉

小野路のまちに暮らす人々
 イリアイの中で、暮らしを主体的に
 選択しながら暮らすことができる

2030年



2021年度 自然環境デザインスタジオA班



自然環境学専攻
三輪桃子

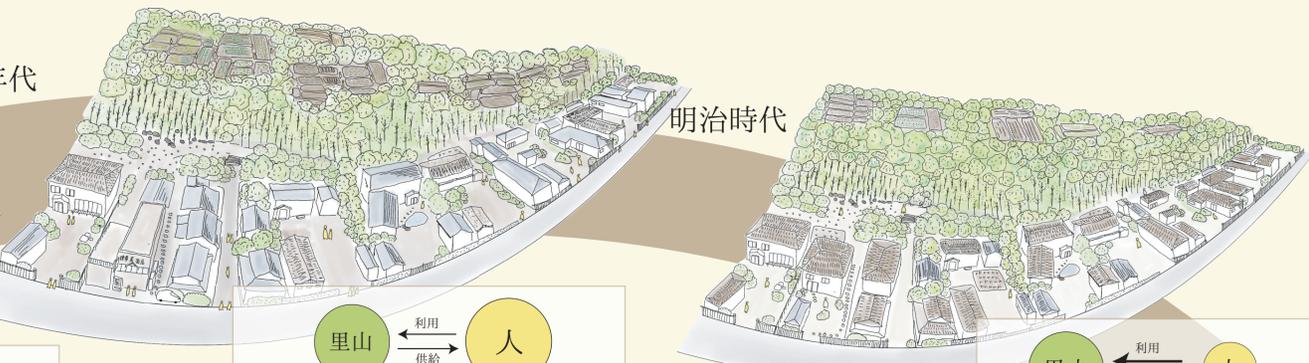


社会文化環境学専攻
正林泰誠



森林科学専攻
石井沙奈

1940年代



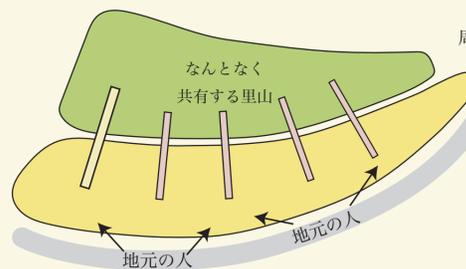
明治時代



3、空間的介入

人と里山の間を再構築するために・・・
 「ヤマ（里山）とマチ（小野路宿通り）を結ぶ軸をつくる」

*ダイアグラム



*時系列



*軸づくりのルール

- その1 日常と里山を様々な結び付ける空間に
- その2 宿場町の文脈を生かして小野路らしさを
- その3 空間の移り変わりはゆっくり丁寧に

2050年



4、リサーチ

時系列で人と里山の関係性の変化を調査していった。利用エネルギーや生活様式の変化といった社会的背景からの影響を受けながら、人と里山の関係性が希薄化してきた。近年里山保全活動が行われているものの、里山と関わりを持っている人や地域は限られているのが現状である。



明治時期の小野路の様子



明治時代



1942年



1960年



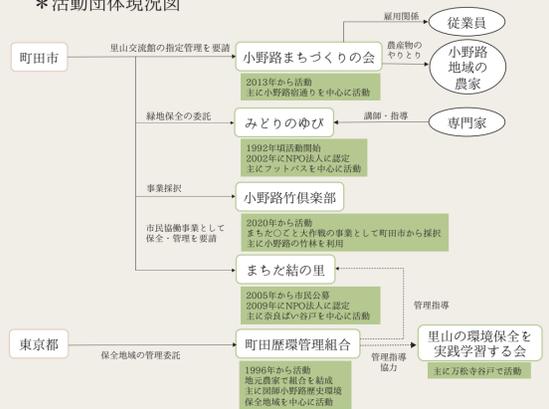
現代



現在

様々な団体が里山や周辺緑地の保全、宿町町の再編などに関わる活動を行っている。活動団体ごとに専門性や活動拠点が異なっているため、お互いの関わりは薄く、町田市を通してわずかに関わりがある程度である。

*活動団体現況図

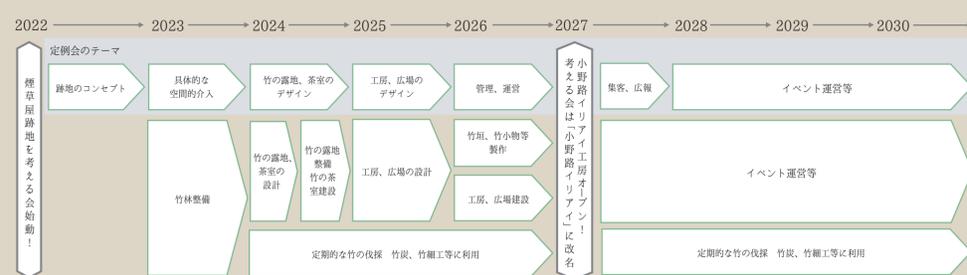


2030年 モデルとなるヤマーマチ軸を1つ完成させる

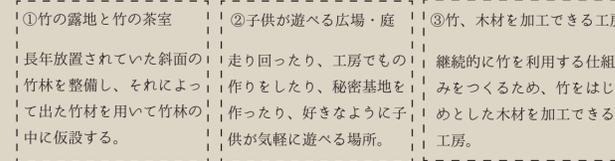
町田市の所有となっている小野路公会堂の横にある空地（煙草屋跡地）の活用方法を考えることを目的とし、2022年に「煙草屋跡地を考える会」を発足させる。2030年までは、モデルとなるヤマーマチ軸を1つ完成させることを目標とし、話し合いや工事を進める。

煙草屋跡地を考える会は、軸をつくるだけでなく、小野路の住民や周辺地域の大学、市の職員などが関係性を築ききっかけとしての役割を果たす。1つ目の軸が完成する2027年には、煙草屋跡地を考える会は「小野路イリアイ」に改名し、里山を利用する人々のコミュニティとして機能し始める。

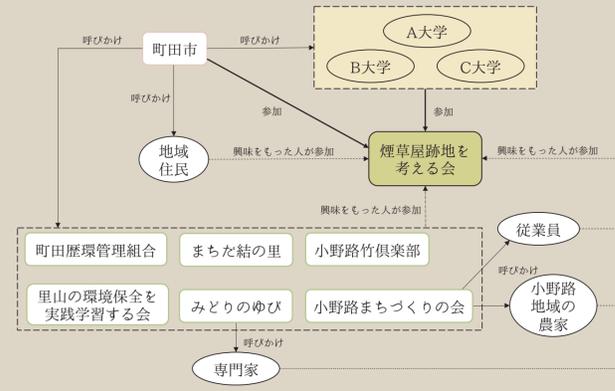
*2030年までの計画



*小野路イリアイ工房



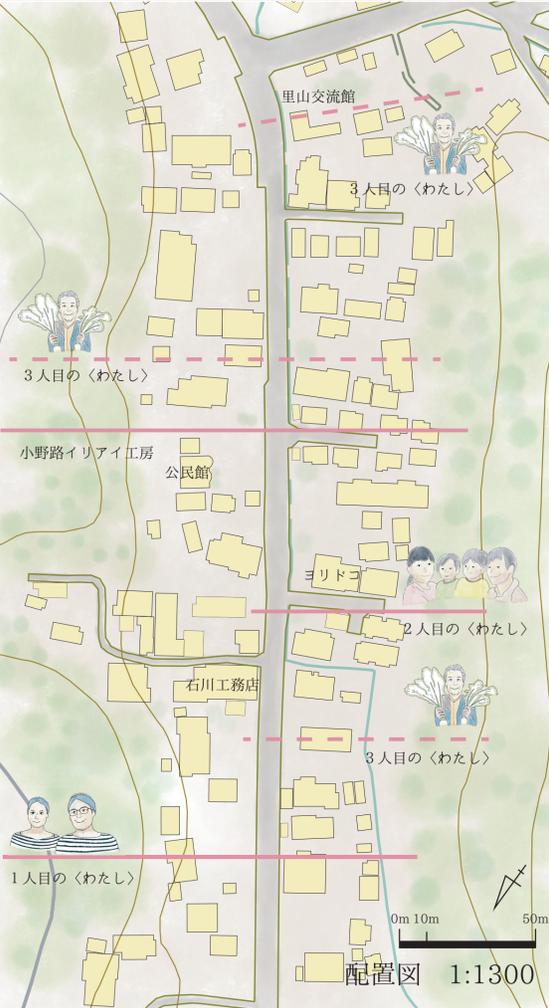
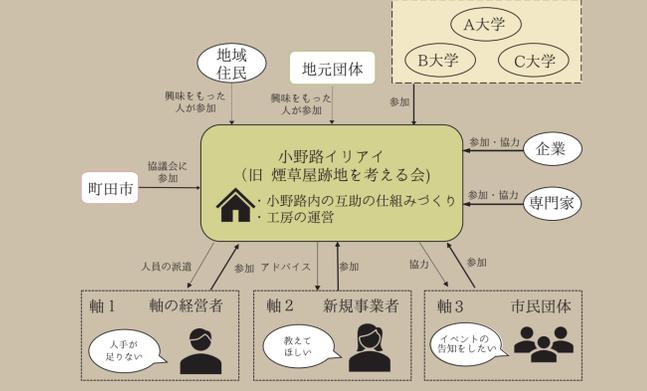
*2030年小野路関係図



2050年 多様な主体により、ヤマーマチ軸が複数完成する

2050年、小野路の人々〈わたし〉は、小野路イリアイ（旧煙草屋跡地を考える会）の中で暮らしている。〈わたし〉は、食事、教育、ものづくり、運動など、様々な機能を求めて、里山を継続的に利用する。利用の目的、頻度等は人それぞれで、気ままに自由に選択することができる。

*2050年小野路関係図



1人目の〈わたし〉

2035年に小野路に移住してきました。ファーマーズマーケットの運営に関わっていた経験を活かし、オーベルジュを経営しています。最初は前職のIT関係の仕事と並行して計画を進めていましたが、軌道に乗り始めてからはオーベルジュ一本に絞っています。小野路イリアイのみさんには、経営のアドバイスをもらったり、従業員として働いてもらったりと、大変助けられています。

タカハシさん夫妻 (40代)

2人目の〈わたし〉

職場への通勤が便利な湘野駅周辺に住んでいます。夫婦ともに仕事が休3日なので、平日の1日は小野路にあるフリースクールの運営に携わっています。本職の経験も生かして里山保全にも関わられるから、すごくやりがいがあります。休日は子どもを連れて宿通りで遊んでやるイベントに行くことが多いかな。子どもたちも小野路に行くのを毎週楽しみにしてるみたいです。この子たちもいずれ小野路イリアイのメンバーになりたいのかな？

サトウさん一家

3人目の〈わたし〉

子どもの頃からずっと小野路に住んでるよ。イリアイ工房ができた頃、友人に誘われて小野路イリアイに参加したんだけど、気付いたら里山に魅了されたよ！仕事をしていた頃は週末にイベントの手伝いにくらいたんだけど、定年退職してからは毎日里山にとっぴり漬かってる。工房で木材加工の指導をしたり、自宅の裏山を手入れしたり、オーベルジュで接客したり……。こんな充実したセカンドライフが夢なんじゃないかって思ったよ！

オノダさん (70代)

2020年以前は環境保全を主要な目的として里山に手を入れていたが、2050年の小野路では里山と日常が結び付いているため、無理なく里山の美しい環境を保全することができている。